



スピノク
日記

町田 康





講談社文庫

スピנק日記

町田 康

講談社

〔著者〕町田 康 作家・パンク歌手。1962年大阪府生まれ。高校時代からバンド活動を始め、'81年に伝説的なパンクバンド「INU」を結成、『メシ喰うな』でレコードデビュー。'92年に処女詩集『供花』刊行。'96年に発表した処女小説「くっすん大黒」で野間文芸新人賞、ドゥマゴ文学賞を受賞。2000年「きれぎれ」で芥川賞、'01年『土間の四十八滝』で萩原朔太郎賞、'02年「権現の踊り子」で川端康成文学賞、'05年『告白』で谷崎潤一郎賞、'08年『宿屋めぐり』で野間文芸賞をそれぞれ受賞。近著に『猫のよびごえ』『スピंक合財帖』『この世のメドレー』『バイ貝』他、著書多数。

公式HP

<http://www.machidakou.com>

スピंक^{につき}日記

まちだ こう
町田 康

© Kou Machida 2014



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

2014年4月15日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——凸版印刷株式会社

印刷——凸版印刷株式会社

製本——加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277818-3

スピク日記 目次

私自身のこと……………	7
主人・ポチのこと（一）……………	17
主人・ポチのこと（二）……………	27
キューティー・セバスチャンのこと……………	38
お留守番……………	50
キューティーが病院へ行く……………	60
キューティーの悲惨な状態……………	70
ポチの利己主義……………	82
蒸米コージ君来訪……………	92
スダチマルダシホール……………	102
主人の敗亡と私の反省……………	111

ポチの気の毒・スズメバチ（一）	124
ポチの気の毒・スズメバチ（二）	134
暇	144
禁止	156
ポチのマジ歌	167
私の秋、ポチの秋	178
失敗の本質（一）	189
失敗の本質（二）	202
暖房問題の結末	213
残りの人生の問題	226
解説 伊藤比呂美	239



講談社文庫

スピנק日記

町田 康

講談社

スピク日記 目次

私自身のこと……………	7
主人・ポチのこと（一）……………	17
主人・ポチのこと（二）……………	27
キューティー・セバスチャンのこと……………	38
お留守番……………	50
キューティーが病院へ行く……………	60
キューティーの悲惨な状態……………	70
ポチの利己主義……………	82
蒸米コージ君来訪……………	92
スダチマルダシホール……………	102
主人の敗亡と私の反省……………	111

ポチの気の毒・スズメバチ（一）	124
ポチの気の毒・スズメバチ（二）	134
暇	144
禁止	156
ポチのマジ歌	167
私の秋、ポチの秋	178
失敗の本質（一）	189
失敗の本質（二）	202
暖房問題の結末	213
残りの人生の問題	226
解説 伊藤比呂美	239

スピ
ンク
日
記

私自身のこと

薄目を開けると微風が吹いています。花菖蒲が咲いています。キューティー・セバスチャンがいつものように、あり得ない場所で眠っています。私はそろそろ起きようか知らん、それとも、もう少し眠ろうか知らん、なんて考えつつ、両の手、両の足を天井の方に、にゆう、と伸ばし、腹を丸出しにしていると、いつの間にかまた眠ってしまつて。

そんなことで次に目が覚めたときはもう八時でした。

いかん、いかん。こんなに寝てしまつて。

そう思つて慌てて飛び起きると、言わんこつちやない、もう九時を回つていて、ふと見ると私の鼻先に二本の足があつて、これはもちろん、キューティー・セバスチャ

ンの足ではなくて主人・ポチの足、慌てて、赤い椅子に座り机に向かいてキーボードをポチポチ叩いている主人・ポチの左の腕に鼻を押しつけて、うほほい、と言うと、主人・ポチも、うひやひやい、と言つて私の頬を撫でました。

私の一日は大体こんな風にして始まります。

私はキューティー・セバスチャンと主人・ポチ、美徴さんとたくさんの猫たちと一緒に暮らしているのです。

まずは私がなぜ、みんなと暮らすようになったのかについてお話しいたしましょうか。というか、その前に、忘れてました、私の名前を申し上げましょう。

私はスピンクといいます。犬です。プードルです。

私はスピンクという名前で、キューティー・セバスチャンと主人・ポチと美徴さんとたくさんの猫たちと一緒に暮らしているのです。

スピンクという名前をつけてくれたのは主人・ポチです。

スピンクという名前はだから気に入っているのですが、困ることもあります。というのは、犬の名前としては聞き慣れない名前らしく、散歩の途中、道行く人に声をかけられ名前を聞かれ、主人・ポチ、または、美徴さんが、「スピンクです」と答えて



も、「えっ？ えっ？」と何度も聞き返され、その都度、二人は、「ス、ピ、ン、ク。です」と、はきはき言つて、それでわかつて貰えるかと言うと、そうでもなくて、「ああ、ピンクちゃん。ピンクちゃん。おいでピンクちゃん」なんて言われるのです。

それで、「ピンクちゃんは女の子？」と聞かれ、「男の子です」と答えると、「あら。男の子なのにピンクちゃんなの」と意外そうにされるのです。

また、年輩の男性はなぜかみな、スピックス、と聞き違い、「スピックス。こいつ。スピックス」と言います。

そんなとき私は、太い声で、「ワン」と言い、前脚をじたじたします。

主人・ポチはクルマを運転しながら私に名前を付けてくれました。

私を空港まで迎えにきて、その帰り道でした。

主人・ポチは焦りに焦つていて、その焦り具合はパニックと呼んでもよいくらいでした。なぜなら、二、三日前から美徴さんに、「家に連れてきてクレートから出したらすぐに名前を呼んで、いろんなことを覚えさせなければならぬので、それまでに名前を決めてください」と言われていたからです。

にもかかわらず、主人・ポチはまだ名前を決められませんでした。家にはあと数十分で着いてしまいます。

主人・ポチはハンドルを握り、前方を見つめたまま、「ギャボス。うーん。だめだ。カボスとギャオスが合併したみたいだ。つうことは、ええつと、ギャンジョーネ。ううん。なんだろう、この濁点の感じは。濁点はやめよう。ゴルボス。ああつ、どうしても濁つてしまう。若いときにボルヘスを読み過ぎた報いだろうか。ムクイーヌ。つて濁つてないけど、こいつはむく犬ではない。ああつ、駄目だあつ。もう芝公園じゃないか。シバ。ダンシングシバ。司馬遷しきなんて頻りに苦悶していましたが、やがて、美徴さんが、「ちよつと暑くない？」と言うと、「そういうことはこのスピנקに仰つてくださらんか」と言い、エアコンのスイッチを押して、「あつ」と言いました。

「どうしたの」

「僕、いまなんて言った」

「そういうことはこのスピנקに仰つてくださらんか、つて言いました」

「あ、スピנק。スピנק、いいんじゃない」

主人・ポチはそう言うのと、いかにも犬を呼ぶような声で、「スピנק。スピנק」

